

彦春町茜

文想感書誌言
論本體圖

第5回
第6回
第7回 第8回
回合併号

読書感想文

『国体論』

第5～8回合併号

著者：茜町春彦

概要：白井聡著『国体論（集英社新書）』を少しずつ読み進めながら、感想文を投稿しています

この記事は第5、6、7、8回の合併号となります。

読者対象：戦前戦後の国家体制に関心のある人

ちょっと引用します。

(P54)・・・象徴天皇を戴く制度が「国体」と呼ばれることは一般になく、それゆえ「国体」という言葉はほぼ死語となった・・・しかし、本当に「国体は死んだ」のか・・・筆者にとって、この問いが鋭く、また今日最重要のものとして突きつけられたのは・・・豊下楢彦の『安保条約の成立—吉田外交と天皇外交』(1996年)を読んだ時であった・・・昭和天皇が積極的にアメリカを「迎え入れた」最大の動機は、共産主義への恐怖と嫌悪であったと豊下は見る。東西対立が激化する中で、内外からの共産主義の浸透を防ぐ守護神として、昭和天皇はアメリカの軍事的プレゼンスを求めたのである・・・そして、戦後史はさらに奇妙なひねりを帯びることになる。当初、共産主義対策を意図した国体護持の手段であったはずの対米従属は、共産主義の脅威が消えてもなお生き延びた、というよりもむしろ強化されることとなった・・・

引用を終わります。

考えてみれば共産圏が崩壊したのが既に一世代前のことですねぇ、もう君主制と云うような時代じゃないですよねぇ。

本当の意味で「戦後レジームからの脱却」をすればいいと思いますよ、つまり共和制への移行という意味ですけどね。

でもそうになると、国民が本当の主権者になってしまうわけだから、それはそれでキャリア官僚が嫌がるだろうなあ。彼等は国民の公僕になる気など更々無いのだからねぇ。たとえば基地問題に国民が主権者として口出しでもしようなら、きっと官僚はハラワタが煮えくり返るくらいに腹を立てるだろうねぇ。

東大卒のキャリア官僚が腹の中で考えている事は、戦前の帝大陸大海大卒のエリート官僚が主導するような国家体制を何が何でも維持することだと思います・・・官尊民卑・・・それを保証してくれるのが対米従属でしょう・・・そしてカジノでもダムでもリニアでも原発でも天下り放題の政策を実行するために必要なものが対米従属なのでしょう・・・そんな気がします。

(次回へ続く)

後書き

参考文献：

次の文献を参考にしました。

- 国体論：2018年4月22日第1刷発行 白井聡著 集英社新書

C G画像：

次の画像処理ソフトウェアを使用しました。

- ArtRage 3 Studio Pro アンビエント社
- Photoshop Elements 10 アドビシステムズ株式会社

著者：

茜町春彦（あかねまちはるひこ）と申します。

2004年より活動を始めたフリーランスのライター&イラストレーターです。独自のアイデア・考察を社会に提示することをミッションとし

、平等で自由な世界の構築を目指して創作活動を行なっております。また、下記WEBサイトに於いても、デジタル作品を公開しております。

- YouTube （動画共有サイト）
- Google+ （ソーシャルネットワークサービス）
- 楽天Kobo電子書籍ストア （ネットショッピングサイト）
- はてなブログ （WEBLOGサービス）
- Facebook ページ （ソーシャルネットワークサービス）
- Pixiv （イラスト投稿サイト）
- カクヨム （小説投稿サイト）
- BOOTH （物販サイト）

その他：

製品名等はメーカー等の登録商標等です。

本書は著作権法により保護されています。

2018年5月25日発行

読書感想文『国体論』第5～8回合併号

<http://p.booklog.jp/book/122228>

著者：茜町春彦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akaneharu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122228>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト